に生活できているのが共和地区の良さとも言える。「先住者の人柄がよく、比較的住みやすい」という声がそのことをよく表している。

移住者と共存するためには、迎え入れる側の体制作りや環境作りが重要ともなってくる。共和地区では地域のリーダー的立場にある人達が受け入れるための空き家の整備や交流の場の設定など、地域ぐるみで対応を積み重ねてきている。

町内の他地域では、移住者と先住者との間で少なからず軋轢が生じることもあるように聞くが、共和地区では一部に「差別意識を感じる」という回答があるものの、大きな障害とはなっていない。

地元の不断の努力と移住者の積極的な地域への関わりにより新たなコミュニティーが創造され、地域が活性化していくものと考えている。

（4）精神的な土台となる「お峯入り」の継承

共和地区としては最も重要な行事として「お峯入り」が世代を越えて継承されている。詳細は前述されているので省略するが、私たちはこのお峯入りの継承こそが共和地区の精神的な支柱となり、共同体意識を培ってきたのではないかと考えている。

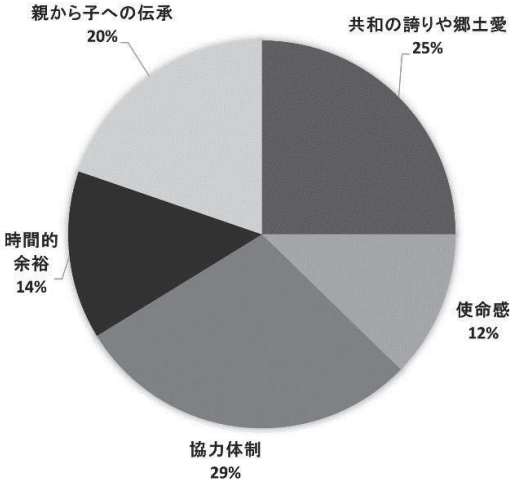
【グラフ③】にもあるように、『共和地区で自慢できること』の中では、「自然の豊かさ」に次いで「お峯入りをはじめとする歴史や文化の伝承」の割合が多くなっている。

南北朝時代に起源をさかのぼるという伝承も残るお峯入りは、記録に残る最古の公演が江戸時代末期であり、それ以後、現在に至るまで 17 回公演されている。最近は「山北のお峯入り」と称しているが、10 年程前までは「共和のお峯入り」であり、共和地区独自の伝統芸能として、記録に残る以前も含めると何百年にも渡り、連綿と受け継がれてきた重要な行事なのである。

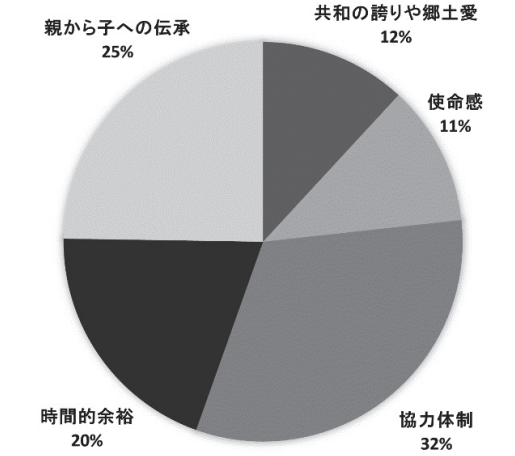
このお峯入りを実施するためには、演者だけでも 80 名ほどが必要とされ、しかも全て男性が担当することとなっている。一方で、地域の女性は、演者のための衣装の直しや着付け、化粧等事前の準備を含め、裏方として大切な仕事を分担することとなっている。

そしてもう一つ重要なことは、各種の演技は各世帯に役割が割り振られており、先祖代々それぞれの家庭で継承していくことが基本となっているのである。

かつてのように、住民が多い時代ならともかく、現在のように人口が減少し、高齢化が進む中での継承は厳しい状況下にあると言える。それでも、アンケートでの『継承するためには何が大切か』という問いかけには、「協力体制」54％と「共和の誇りと郷土愛」46％と高い割合を示しており、課題を克服し



グラフ⑤ お峯入りを継承していくには何が大切ですか。



グラフ⑥ お峯入りを継承する上で何がむずかしいですが。

つつ継承しようとする意志は強いものと判断できる。次代を引き継ぐ若い人達が他の市や町で生活する家庭も多くなり、最近の公演では離れて暮らす子ども達をその都度呼び集め、何とか80名を確保する状態が続いている。アンケート調査でも「協力体制の維持」とともに「親から子への伝承」を危惧する声も多くなっている。現在は５年に１回の公演であり、「親から子への伝承」と同時に「技能の伝承」も課題となってきそうで、自由記述欄にはそういった指摘もなされている。

人口の減少や少子高齢化が進む状況下でのお峯入りの継続・継承は、地域にとっての重要な課題でもあり、難題でもあるが、前述したようにお峯入りにより地域の縦横の繋がりが強化され、地域全体のまとまりが維持されてきたのではないだろうか。

これまでもいくつかの課題をその都度克服し、乗り越えてきた共和地区は、それなりのたくましさと同時に、数年前に文教大学の学生が地域の調査を行った際に、「共和地区には宝がある」と表現しているとおり、未知の可能性を秘めた地域であるとも言えそうである。

７　これからの時代の社会教育のあり方とは

（１）地域共同体意識の醸成

かなり以前から「地方における都市化現象」という言葉を、マスコミが採り上げるようになってきた。昭和 30 年代の後半から 50 年代にかけて、高度経済成長という未曽有の発展をとげた我が国ではあるが、その反面では人口の都市集中と地方の過疎化、核家族の増加と自己中心主義の台頭、経済至上主義と格差の拡大等の、言うなれば負の部分もあらわになってきた時代であったとも言える。

最近では少子高齢化や過疎化により、全国各地で住民の心の支えとも言うべき小中学校の統廃合が進み、地域の一体感が薄れつつあるという声も聞くようになった。また最近では SNS を利用した心ない排他的な誹謗中傷も増加傾向にあり、人々の心を繋ぐ糸は益々細くなっているようにも感じとれる。このように世の中が大きく変化しつつある中において、都会のみならず地方においても次第にコミュニティーを維持する機能が減少してきたのではないかと危惧されている。

コミュニティーを広辞苑で引くと「一定の地域に居住し、所属意識を持つ人々の集団・地域社会・共同体」と記されている。ここで重要なのは「所属意識」である。もともとが農耕民族である我が国では、集団に帰属することが唯一生き残る手段であり、農村を中心に「結い」や「講」という組織が作られ、互いに助け合い協力しながら生活を続けてきたという長い歴史がある。強制される所属意識ではなく、個々の住民の主体的な所属意識をどのように構築していくかは、社会教育の充実のみならず、地域の活性化を図る上でも重要な課題と言える。

「所属意識」を測るのは難しいが、ここでは共和地区の各種行事への参加率で考えてみたい。アンケート結果では、「行事によく参加する」「参加する」は合わせると 52％となり、辛うじて半数をしめている。どのような行事に参加しているかを参加率の高い順に並べたのが、次の表である。

行事名	防災訓練	夏祭り	エコの日	環境整備	道づくり	どんど焼き
参加率	63％	54％	48％	45％	43％	42％

夏祭りやどんど焼き以外には、いわゆる地域の共同作業的な行事が上位をしめている。家族で参加できる夏祭り等の行事と、原則各世帯１名の参加による作業的な行事とを一律

に比較することには無理があるが、集落が点在する山間部の過疎地域としては、比較的まとまりがよいのではないかと考えられる。ただこの行事に関しては、自由記述欄には多くの意見が寄せられている。「高齢化で参加が難しい」「行事が多すぎるので精選すべき」あるいは「組織が多いので再編すべき」と言うような声も多く、今後の検討が必要であろうと思う。

令和２年８月５日、朝日新聞の声欄（投書欄）に「所属意識」に関わる投稿が寄せられている。問題提起をしたのは地方に住む 80 代の男性で、「自治会での共同作業は時代遅れなのか？」という問いかけであった。

投稿者の主旨は「地域にある神社の境内の芝生撤去や砂利の敷設は、地域住民が協力して実施すべきであり、業者任せでは折角の絆づくりの機会を失う」という内容であったが、最近では米作りも業者に委託する農家が多くなり、「金を払えば済むことだ」という声で決定されてしまったそうである。

この「自分の考えは古いのか？」と自問自答する男性に対し、50 代から 80 代の男女５名が応える形で投稿しているが、その多くは「共同作業を、交流や絆を深める場として続けるのは望ましいが、少子化・高齢化が進む昨今、各世帯の負担になっているのではないか」とし、時代の流れに応じて業者に委託することがあっても、やむを得ないのではないかと意見を述べている。

この様な考え方が地域住民の一般的な、あるいは標準的な意向とするならば、地域のリーダー達はアンテナを高くして、今までの諸活動を振り返る必要が出てくる。

俳句の世界に「不易と流行」という言葉があるように、時代の流れに応じて変えていってもよいものと、変えていくべきではないものとを熟考すると共に、住民の意向を汲み上げて創意工夫をし、負担が加重とならないように配慮しつつ、**共に生きる**地域社会づくりを目指していく必要があるのではないだろうか。

５名の投稿者のうちの１名が「共同作業は義務か楽しみか？それは地域を誇りに思えるか次第だと思っている。」と述べている。地方では少子化・高齢化・過疎化と、まるで三重苦のような状況ではあるが、居住する地域への愛情や誇り、そして**共に生きる**ことを住民が確かめ合うことにより、忘れかけていた**地域共同体意識**を取り戻すことができるのではないかと考える。

（２）地域を活かす（地域の宝）

日本の原風景とも言われる農村や里山のみならず、開発が進む大都市の近郊や大都会の中心部においても、そこに住む人々にとっては「ふるさと」と言える場所である。古きよき時代を回顧するだけではなく、居住する現在の地域を見つめ直し、新たな視点で地域の良さを再認識してみてはどうだろうか。

平成時代の市町村の大合併により、特に地方では多くの町や村が吸収合併されたが、その多くが行政機関の縮小や学校の統廃合等により、活気を失うと共に過疎化が一段と進むという現象がおきている。子ども達は中心部の学校までスクールバスで登下校するため、周辺のお年寄りとの接触が少なくなったという声もある。地域社会が様変わりをし、以前に比べると人と人との関わりが希薄になっている状況において、地域の良さを再認識するのは難しい作業とも言えるが、地域を活性化させるためには避けて通れない道筋であると言える。

こういった中で、地方によっては荒廃した里山の再生に取り組んだり、都会の子ども達を山村留学として積極的に招いたり、あるいは地域ぐるみで移住者を受け入れるというように、様々な工夫や努力を重ねながら、地域の良さの発信や定住促進に力を注いでいる地方自治体や NPO 法人もある。

日常的に生活をしている住民にはよく判らなくても、他の人々の眼から見るとその地区のプラス面が見えることもある。共和地区に調査に入った学生が「共和地区には“宝”がある」と言い残したことや、またその学生の中には卒業後に共和地区に移住した若者がいることなどがその例である。どこの地域でも、歴史や文化、民俗関係や自然環境、更には人的環境等々を含め、隠れている“宝”があるのではないだろうか。

私たちが住む山北町でも、NPO法人や地域団体等が山北町の良さの発信を行っている。活動事例として、旧東海道線の時代の「鉄道遺産」や中世に築かれた「河村城」を中心とする歴史関係、「お峯入り」や「流鏑馬」、「百万遍念仏」等の無形民俗文化財、近世の水との戦いとも言える「酒匂川と用水」等についてのパンフレット作成などがある。

この取り組みは新住民を含めた地域の人々に**わが町・わが地域**の良さを再認識・再発見してもらうと共に、他の地域にも発信し、**地域を見直し、活かす**活動の一環として位置づけ、スタートしたものである。

自分たちが生活する地域の自然や文化、歴史、習俗等を新たな視点で見直すことにより、見過ごしていたり或いは気付かなかったりした事象に出会うことはあり得るであろう。それが**地域を活かす**きっかけとなることを願っている。

（３）“核”となる活動の継続

学校教育以外の場で、青少年及び成人を対象として行われる組織的な教育活動を社会教育と呼んでいる。山北町では平成30年３月に「子どもから高齢者まで、生涯にわたり学び、生きがいのある充実した人生をおくることができる生涯学習社会の実現」という基本目標を掲げた『山北町生涯学習推進プラン』を策定し、その具現化に向けて取り組んでいる。

この基本目標に基づき、さまざまなサークルや団体・組織が主に生涯学習センター等の公的施設を利用し活動を行っている。あくまでも意図的・計画的な教育活動であり、最終的にはそれぞれが自己実現を目指すという有為な活動でなくてはならない。「活動していれば何でもあり」という風潮が無きにしも非ずだが、この**意図的・計画的**、そして**自己実現**というキーワードを肝に銘ずるべきであろう。

ここでは、大勢の住民が関わる地域ぐるみの活動について述べたい。前述した共和地区に業者等が介在しない手作りの夏祭りや、江戸時代から続くお峯入りという大きな行事があったように、全国各地で地域に根ざした多様な行事が展開されている。

元をたたせば、神社仏閣の行事に由来するものや、古くからの歴史に起因する行事、あるいは民衆の側から沸き起こった行事等、その趣旨や形態は多種多様ではあるが、連綿と続けられてきた背景には、地域の一体感や連帯感、そして所属意識を維持し、継続させようとする意図があったのではないだろうか。

山北町では、少子化や子ども達の生活の変化等により、10年程前から子ども会活動が衰退し、各地域にあった婦人会も縮小され、更には個人情報の保護等もあって、地域の縦横を繋ぐ糸は目に見えないほどに細くなっている。こういった現状において、唯一地域の人々が顔を合わせる機会が、神社の祭礼や地域の夏祭り等のやや規模の大きい行事のみとなってしまっている。

地域が一丸となって取り組むことができる地域の“核”となるような活動を大切にし、継続していくことが求められてくるのではないだろうか。同じ場所に集まり、同じ時間を過ごし、そして一体感を共有するという重要な場面を、特に主催する側が意図的に構築しなければならないと思う。

（４）人口減少や高齢化への対応

過疎化や少子高齢化という大きな問題は、一地方や一地域で取り組めるような課題ではない。国として考えるべき課題であろう。我が国では高度経済成長をなし終えた昭和時代の末期頃から、有識者の間で少子高齢化の時代が迫ってきているという指摘がなされていた。同時期に同じような状況下にあったフランスは、第２子、第３子と子どもが増えるほどに税率が低くなり、育児休暇に対する所得補償や出産費の無料化、非正規雇用者や低所得層の教育費の軽減等々適切な対策を講じたが、我が国は有効な対策を打ち出せなかった。

このままでは更なる少子高齢化時代となってしまいそうである。山北町でも住宅地の周辺で遊ぶ子ども達の声を聞くことが少なくなり、高齢者のみの家庭や一人住まいの世帯も多くなって、生活弱者や交通弱者が増えているのが現状である。

町としては子育てへの支援や循環バスの運行、定住を促進するための様々な対策等に取り組んではいるものの、人口減少を押し止めるまでには至っていない。

こういった状況下において一地域でできることは、共和地区のように手探り状態で草の根的に口コミで移住者を増やしていく方法や福祉バスを運行して、高齢者の移動手段を確保する等という取り組みに限られてくるのではないだろうか。そのためには、空き家の管理や整備、福祉バスの維持管理等人手や費用が必要となってくるが、できることから少しずつ解決をしていくことが、集落の維持、そして地域の維持に繋がってくるのではないかと考えている。

私たちはこの世に誕生してから、**多くの人々、さまざまな物、いくつもの出来事**という「ひと・もの・こと」と関わり、そこから多くのことを学び取りながら、人としての成長を遂げていくと言われている。社会教育もその一端を担っているわけであるが、人と人との関わりが薄れ、経済格差も拡大し、「共に生きる」「共に育てる」という意識が低下するという社会状況を考えると、特にこれからの時代を生きる青少年に、**生きる術**をしっかり身につけさせることができるのか、生き方を学ぶ機会を与えることができるのか、甚だ心配な状況下にあると言えるのではないだろうか。

（５）行政のバックアップ

どこの自治体も学校教育と同様に、社会教育にも重点をおいて取り組んでいる。学校教育を終えてからの長い人生をどのように有意義に過ごすかという問題は、自己教育力を高めるだけではなく、地域全体の活力にも繋がる大きな原動力ともなり得るからである。

私たちは老いも若きも学び続ける意欲を持ち続け、意図的・計画的にさまざまな活動を継続し、自己肯定感を体感しながら、そのすそ野を拡げていかなくてはならない。

社会教育を充実させるためには、行政の支援が必要となってくる。青少年から高齢者までという幅広い年齢層を対象とするため、それに対応できる指導者やリーダーの養成という人的環境の整備をはじめ、多様な活動を実践するための施設や場所の確保等の物的環境の整備、そして活動をより充実させるための予算の確保等々である。

共和地区の自由記述にもあった生活道路の整備等の要望も、広く考えれば人々の交流や活動を支えるためであり、社会教育活動に直結する課題であるとも言える。

経済が低迷し、各自治体の財政は厳しい状況ではあるが、将来を見据えた長期の展望にたった政策の立案と何にお金をかけるかを住民を交えた中で十分に検討してほしいと願う次第である。

昔から教育は「国家百年の計」とも言われ、また戊辰戦争当時の越後長岡藩には「米百俵」の逸話も残っているように、先人達は教育の重要性を十分に認識していたのである。私たちも学校教育・社会教育を問わず、新たな気持ちでこれからの時代に即応した教育に重点を置き、取り組んでいきたいと考えている。

８　山北町の魅力の発信

共和地区に移住して①

林業　冨田　陽子

「森林に関する仕事がしたい。森と人をつなげたい。」この思いを実現できる場所かもしれない。これが共和地区に移住した理由です。

中学生の頃から森林に関わる仕事に就きたくて、山形大学の農学部で森林や環境について学びましたが、もっと山のことが知りたくて三重県の林業の現場に飛び込みました。実際働いてみると学校では教えてくれなかった補助金頼みの林業を目の当たりにしました。補助金申請の事務が増える毎日に嫌気がさし、補助金で山がよくなっていると実感できず、５年ほど働き一旦林業から離れました。

その後、気分転換で旅をしたオーストラリアのキュランダ村で、熱帯雨林再生をしているグループに出会い、働かせてもらえることに。そこでは自分たちの地域の森に、種を集めて苗木を育てることから森を再生していました。日本でもこんな森づくりがしたい、活動できる地域に移住したい。そこで縁あってたどり着いたのが、共和地区の森づくりです。

共和地区では財産区の山を自分たちの山だということを再認識し、雇用を生む森、動物と共存できる森、災害に強い森づくりを住民で始めていたところでした。苗を植えてもシカに喰われたりと失敗の連続ですが、私自身も勉強しながら森づくりの一端を担い、2016年に移住して５年になります。現在は、来た当初植えたクヌギ・コナラの苗木がやっと自分の背丈を超えるくらいまで成長しています。今後は、森づくりを進めつつ、スギややむなく伐られてしまった木々を、町内をはじめとした多くの人に使ってもらえるようにしていきたいです。

私生活では、大学の同級生であるパートナーも移住をし、共に林業と稲作をしています。2018年に結婚し、息子も生まれ２歳５か月になりました。まさか２人で林業をやるとは想像していなかったのですが、学生時代に話していた自給自足を目指した暮らし方は、少しずつ実現しています。自分で切った木を使いエネルギーも自給できる家を建てるのが夢です。

ここは様々な動植物が生息し、水がきれいで豊かでとても美しいです。でも昔の話を聞くと、皆瀬川には30年ほど前にはウナギがいて夏には釣りに行ったとか、あちこちでホタルがみられたなど、昔はもっと自然豊かで、それがだんだんと失われつつあるなと感じています。東京で育った私は大人になるまで野外でカブトムシさえみたことがなかったです。ここにはお金では買えないおいしい水や生活を豊かにしてくれる生き物たちがいます。子どもたちに豊かな自然を残したり、失われたものを復活させて自然の中で思いっきり遊んでもらいたいです。こんな想いを実現させていけたらと思っています。

共和地区に移住して②

薫る野牧場　花坂 薫

私は、2016 年 10 月に山北町共和地区に移住し、2018 年４月から共和財産区の山（8.8ha）をお借りして、同年６月より山地（やまち）酪農を行っております。

出身は相模原市ですが、高校時代に駅伝の大会で毎年丹沢湖に来ていました。東京農業大（北海道網走キャンパス）で食品製造について学んでいた中で、「黒い牛乳（中洞正著）」という本に出会い、山地酪農を実践する中洞牧場（岩手県岩泉町）へ行き、卒業後の４年半の間に働きながら多くのことを教えていただきました。

いずれ自分で山を買うか借りるかして山地酪農を始めたいと考えていたころ、共和地区の数名の方が、同じく中洞正氏の著書で山地酪農を知り、2016 年３月に閉鎖になる県立大野山乳牛育成牧場の跡地利用について、中洞氏に相談をされていると聞いた私は、ぜひ大野山の土地を使わせてほしいとお願いしました。

まず共和地区に住まわせていただくにあたり、地域で運営していた売店の建物を改装していただき、共和のもりセンターやかどやファームさんでのお仕事を紹介していただくなど、少しずつ地域のことを知りました。すでに共和地区には 20～30 代の若者が複数名移住していたこともあってか、地域の方々は私のことも温かく迎えてくださり、畑で採れた野菜やごはんのおかず、お菓子やみかんをいただいたり、よく気にかけて声をかけてくださったり、牛を飼うにあたっての相談を親身になって聞いてくださり、とてもありがたく思っています。

私と同じように、中洞牧場を出て独立しようと全国各地に散らばった仲間や先輩が、なかなか地域の方の理解を得られず苦労しているといった話をよく聞いていたので、それなりに覚悟していたのですが、多くの方に応援していただけたお陰で、無事に自分の牛を迎えることができました。このあたりでは少し前までほとんどのお家で牛を飼い、共和牛乳を作っていたという歴史の背景もあるのかもしれません。

また、共和地区の方々だけでなく、山北町のいろんな方に気にかけていただいていると感じております。ソフトクリームや牛乳等の販売をしてくださるお店の方や、それを買ってくださる方、どんなことでも相談に乗ってくださる方、もちろん、日々の牧場作業を手伝ってもらっている 20 代の２人（共和地区移住者）等、挙げればきりがありません。

まだまだ山地酪農は全国的にも数少ない酪農手法のために、メディアの取材を受けることもある中で、「女性一人で牛を飼っている」と表現されてしまうことが多かったのですが、私は必ず「共和地区や山北町の方々に助けていただいているので、一人でやっているという書き方はしないでほしい」とお伝えしています。

外から来た私にとって、共和地区の方々はもちろん、山北町の方々は、みなさんが思っている以上に大きい存在です。この土地に移住して、本当に良かったと思っています。

これからも、私のような人間を応援していただけたら嬉しいです。

９　共和地区の行事に参加して

（１）夏祭り

報告者：山北町社会教育委員　関　優子

取材日：令和元年８月 11 日（日）　場所：共和のもりセンター（旧・共和小学校）

山北町の地形は、森林に囲まれている。それらを生かすことで、町が成り立っている部分があると思う。まさに共和地区はその先端を行っている。一年に一回の大きなイベントとして森林に感謝をする気持ちと仲間・地域に感謝する気持ちで賑やかに夏祭りを毎年行っている。

今年は、看板の文字を昨年より大きく描いていたが、これも共和をもっともっと大きくするという願いを込めたものだそうだ。また、今回の夜店は、すべて手作りの店で的屋は一軒もなく、ここでも新しく「射的店」を増設し、全部で９店舗となった。「焼鳥店」では、一家で祭りを盛り上げ、小学生の子が大きなカードをもってお客さんに声をかけていた。ほっこりした雰囲気の中で、とてもおいしい焼き鳥を味わえた。

他地区からも演者が何人か来られ、踊りや歌を披露された。ソーランをしている団体は、声がかかり喜んで来させてもらったと言う。出演された団体はすべて出演料はなしである。

ステージ発表も、子ども、若者、お年寄りまでが喜ばれるよう工夫されたジャンルの広いプログラムで構成されていた。私も個人的に学生時代に流行した歌などを聞き、タイムスリップしてしまった。この祭りがまるで、都会に来たようで、山の中で開かれたとは思えなかった。町内で最も世帯数が少ない地域であるのに関わらず、すごい団結力を感じると同時に人や地域を大切にしている思いが伝わってきた。

また、共和小学校が閉校になってからも、建物を生かして上手に工夫したり、川崎市の方とは、共に仲間として交流会やそうめん流しなどを積極的に実施したりしている。これらの取り組みは、山北の人口増につながっていくきっかけとなるのではないかと思う。

今回このようにたくさんの人たちが参加されているのを見て、都会から参加された方には、共和地区の自然の豊かさや人の温かさを感じながら、これからもずっと、このつながりを大切にして、ゆったりと心をいやしてほしいと思う。共和だけでなく、他の山北の地区も自然の豊かさや人のつながりを大切にしている「山北の良さ」をＰＲしていくことが大切なことだと思う。

（２）夏祭り

報告者：山北町社会教育委員　瀧澤　康子

取材日：令和元年８月 11 日（日）　場所：共和のもりセンター（旧・共和小学校）

＜実行委員長による開会宣言＞

大きくてどっしりとした看板に圧倒される。雨天時にも対応できる常設の舞台は歌って踊れる広さは十分で、音響設備も素晴らしかった。

＜太鼓の合図で子ども神輿の始まり＞

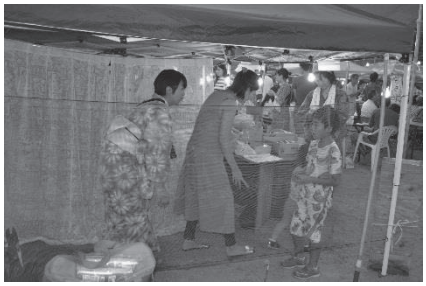
オープニングセレモニーは子ども神輿。３歳から５年生までの 14～15 人の子ども達が法被姿で場内を２周練り歩く。全員が共和地区以外に在住の子ども達だったが、保護者のビデオ撮影隊が取り巻き、

盛り上がっていた。

＜18 時からの夜店は９店＞

実行委員会が公募して出店を決定した。店は準備から運営まで全て個人が行うスタイルが初回から引き継がれており、的屋とは異なる独自の雰囲気を持っており、出店者のこだわりも強いようだ。今回初出店となる「輪投げ」「射的ゲーム」の出店者の思い入れは非常に強く、子ども達は何度も挑戦し、目を輝かせて景品を選んでいた。付き添いの大人も楽しんでいた。昨年は農産物販売と焼きそばがあったそうだ。

・輪投げ



山北駅前の日曜朝市で共和地区の間伐の端材を利用してオブジェの販売をしていた。輪投げに活用したら楽しいのではとの提案を受け、夏祭りへの参加を決めた。輪は蔓で作り、３回挑戦できる。景品はお菓子なので、子どもに好評だった。営業時間が 18～19 時までと限られていたのは、店主の女性が夏祭りの司会も担当していたからである。

・射的ゲーム

南足柄市や中井町の祭りで好評だったので、共和地区でも子ども達に楽しんでもらいたいと出店。景品は全て寄付で賄っており、子どもの喜ぶおもちゃ、文房具、雑貨などがあった。他地区でも声がかかれば出かけていくし、道具の貸し出しもするので、この活動を通して町づくりや子どもの活動に発展させていきたいと語っていた。

・焼き鳥（富山商店）

夏祭りの名物店。親子６人で切り盛りしている姿は壮観。仕入れは契約している御殿場の肉屋まで行き、３日前から下ごしらえを始める。焼き鳥 600 本の串刺し等の準備は、家族の協力が無くてはできない。５本、10 本と予約が入り、飛ぶように売れていく。これを目当てに来ている人もいるそうで、味には絶対の自信があると胸を張っていた。

・綿菓子

ベテランのお年寄りが担当。機械は社会福祉協議会からのレンタル。唯一無料で提供している店のため、次第に行列ができ、綿菓子づくりに追われていた。余裕があれば、子ども達に体験させたいと言っていた。

・トウモロコシ

毎年担当のおばさまグループ。山梨県から 200 本仕入れ、茹でるまでの作業を前日までにしておく。ほとんどの人が購入して、子ども達は食べ歩きを楽しんでいた。毎年評判がいいので、やりがいがあると話していた。

・天然酵母パン

共和地区に移住してきた 20 代の青年が担当。リヤカーのパン屋として山北町内で販売し、馴染みの客も増えてきている。谷ケで他の２人と工場での製造も始めたようで、種類が多く、評判も良い。１人での出店はここだけだが、客との会話を楽しんでいた。

＜参加者の声＞
・共和は母方の実家があるので、今回で３回目の参加。子どもが楽しみにしていて、親子で一緒に参加できることを大切にしたい。毎回満足している。
・知り合いに誘われて、今年初めて参加した。小田原から来た。子どもが楽しめる夏祭りなので、子ども神輿から参加して、とても楽しんでいる。
・仕事関係の方に声をかけられて、一人で参加したが、雰囲気がとても良い。
・農協関係でグループ参加。ステージを楽しんでいる。
・祖父母の家に横浜から来た。いとこにも会えて、遊べるので楽しい。横浜でも模擬店が沢山出る夏祭りはあるが、ステージがあるのは共和だけ。いろいろ見ることができて良いと思う。
・ポテトフライの詰め放題が良かった。
・輪投げと射的が楽しい。
＜はじめ塾（市間寮）からの参加＞
・夏休みなので、小学生から大学生まで 50 人以上が参加
・かき氷を出店し、ステージでは「はごろも謡いと舞」を発表
・「ハナミズキ」によるダンスに参加した女子は、馴染みの曲で、練習しなくてもだれでも踊れるので、自然とみんなで動けたとのこと。
・毎年、みんな楽しみにしている。人気はトウモロコシとかき氷。
・合宿中の子も日帰りの子もいろいろいるが、学年を越えてみんなと過ごせる時間が良い。
・塾長もお子さんと参加。
＜川崎市職員へのインタビュー＞
平成 23 年、水源地利用における交流会協定の話が始まり、平成 24 年に協定を締結し、平成 26 年から川崎市民が共和地区の行事に参加するようになった。年３回開催する間伐事業では、流しそうめんやヤマメの塩焼きも振る舞われ、小学生と保護者 40 名がバス２台で参加しているが、近年は希望者が多く、抽選となっている。
今回インタビューを受けてくれた方は、交流事業を立ち上げた際の担当者で、現在は違う部署に異動となったが、毎年夏祭りに参加しているとのこと。今でも年２～３回バーベキューを企画してもらい、個人的に共和地区を訪れる人が何人もいるようだ。発足当時から変わらぬ共和地区の人たちの受け入れ態勢と熱意が、今も事業を継続できている源であると熱く語ってくれた。
＜参加しての感想＞
焼き鳥販売は下準備から販売まで役割分担ができていて、家族総出の名物店となっている。またステージの「タヒチアンダンス」は夫婦と友人でプロレベルの演技を披露している。家族を中心にした参加が多いことが、夏祭りが盛り上がる要因の一つではないか。
店のやり繰りは自己責任、ステージの出演料なども一切かけずに運営していることがすごいと思った。１回目からこの方針で行っているのは、実行委員会が機能し、協力体制が整っているからだと感じた。
与えられた協定事業を継続していくだけでも大変だが、もっと盛り上げようと間伐事業以外の内容を組み入れることを検討することで、相互理解が深まったのだろうと、川崎市職員にインタビューをして思った。提案者と実際に運営する支援者のエネルギーに圧倒された。担当者間の事業を通した繋がりの深さは行政の枠に留まらず、今でも地区行事への交流が継続されていることからも感じることができる。

（３）**エコの日**

報告者：山北町社会教育委員　村上　健士郎

取材日：令和元年９月 22 日（日）　場所：福祉バス路線沿線

数年前より共和地区でも被害が出始めたヤマビル駆除対策として、バスの運行経路を中心とした沿道への薬剤散布を地域住民で行うことが行事の目的です。

集合場所の共和のもりセンターで責任者の説明・諸注意の後、全体を２グループに分け、二方向で作業に入ります。作業内容は、先に塩化カルシウムを道路に撒き、そのあと薬剤（リンゴ酸）を散布します。塩化カルシウムは容器に入れ、手袋をして直接撒き、薬剤は軽トラに乗せた大型の水槽から散布機を使い沿道に撒いていきます。

共和地区のヤマビルの被害は深刻なようで山道だけでなく、参加者の話によると畑や庭で作業などしていてもヒルに襲われることもあるし、共和のもりセンターの広場にも出没するそうです。この地区は山深い場所であるがヤマビルの被害は数年前まではほとんどなかったようです。しかし、新東名建設工事が始まり工事関係者が被害にあうようになったころから共和地区でも話題になり始めました。以前から三保地区などではヤマビルの情報があったのですが、いつの間にか清水地区、共和地区まで下ってきたようです。動物を媒介にして下ってきたと考えられますが、はっきりとした原因はわかっていません。

共和地区、清水地区は観光資源の大野山や県立山北つぶらの公園をかかえているので、登山者・観光客にとっても大きな問題となりうるでしょう。今までは個人対応で駆除していたようですが、今年度より共和地区では年２回地域で駆除をすることになり、７月に続き今回が２回目になります。

実際に駆除に参加してみると、共和地区が大野山登山道の一部であり、上り下りが多く、道も車がすれ違えないような場所や、落石の跡や崖が迫っている個所など山岳地帯であることを改めて認識させられました。今回の作業に参加して感じたことは、地区全体から見れば一部の駆除作業ですが、それでも範囲が広く大変な労力を要するということと、今後も被害が続くようなら、地区の問題ではなく町の問題としても考えていかなければならないということです。

参加者は三十数名で、男性ばかりでなく女性の参加もありました。みなさん、和気あいあいとして日頃からコミュニケーションがよくとれている地区だなと感じました。集合場所での説明の時、ヤマビルの話ではみなさんそれぞれ経験があるようで、被害状況や薬剤の紹介など真剣に聞いていました。除草のような美化作業は別にあるということなので、新たに加わった自治会の行事ですが、みなさんがすすんで参加している様子がよくわかり、共同体としてのまとまりや意識の高さが伝わってきました。また作業とは関係ない感想になりますが、共和のもりセンターは活動場所としては適当な広さ（人が集まるスペース、物品置場、休憩所等）を備え、広場は駐車スペースを確保でき、各行事の開催や準備には都合がよく、地区のコミュニティーとしての役割を担っていると感じさせられました。廃校舎を有効活用されている一例となるでしょう。

天気予報とは異なり晴天の中、２時間ほど山道を歩きまわり、日ごろの運動不足の解消になるような一日でした。作業の後にお弁当もいただき、ありがとうございました。

（4）さんまの夕べ

報告者：山北町社会教育委員　清水　玲子

取材日：令和元年 10 月 19 日（土）　場所：共和のもりセンター（旧・共和小学校）

サンマの夕べは､15 年も続く共和の行事です｡役員さんを中心に青少年健全育成会の方々が準備をしていました。また、参加している子どもたちも料理作りをしていました。共和の子どもたちの参加はありませんでしたが、地域にゆかりのある町外在住の子どもたちが参加していました。さんまの夕べで、子どもたちに料理作りを体験させたいという役員さんの思いがあります。参加人数は、50 人ほどで例年より少なかったようです。いつもは、アトラクションがあるため、参加者も多くなっているようです。時間になると家族そろって集まってきました。三世代で参加している家族も見られました。また、共和地区だけでなく、町内の他地区、大井町、熱海市などからも参加していました。参加者は、お皿や箸、お椀以外にトレーやミニテーブル、敷物などを用意し車座になって食事を楽しんでいました。

・献　立

サンマの炊き込みご飯・究極の炭火焼サンマ・みそ汁・千成うり

・究極の炭火焼サンマ（今年のサンマは厚岸産）

こだわりのサンマです。焼き方は、網にオイルとレモン汁を塗ってから炭火で 40～50 分かけてじっくり焼いていました。そうすることで、サンマの皮が破れない究極のサンマが焼きあがるそうです。サンマを焼いていたのは、男の人 3 人で、サンマにつきっきりで火加減を見ながら焼いていました。毎年焼いているが、なかなか上手に焼けないと言っていました。実際に食べてみると、家でガスで焼いたものとは、全然違ってとてもおいしかったです。

サンマを焼いていた炭は、共和で焼いたものでした。共和の人以外も炭焼きをしに来られている方々がいますが、高齢化が進んでいるそうです。

・食事の配膳

テーブルにお料理が入った鍋とサンマが並べられ、各自で食べられるだけ器によそっていきます。これにも理由があります。特に子どもたちへですが、「何でもやってもらうのではなく、自分で食べられるだけ自分でよそってほしい。そして、自分のご飯は自分で作れるようになってほしい」という思いです。

・山の中でサンマ

海のない山の中の共和地区でなぜさんまの夕べを行っているか？「海の恵みは山の恵みから」と言われています。豊かな海を守るためには、そこに注ぐ川が大切であり、そのためには、源流の森の環境をよくすることが不可欠です。共和でも山を大事にしています。共和の山の栄養が海を豊かにするという考えから、山の中でさんまの夕べを行うようになったそうです。

小さな子どももサンマの炊き込みご飯やサンマの塩焼きをとてもおいしそうに食べている様子がとても印象的でした。魚離れが言われていますが、旬のものをおいしく食べられる、そして家族そろって食べる「さんまの夕べ」は、とても意義のある行事だなと思いました。

（５）ゲートボール大会

報告者：山北町社会教育委員　藤澤　秀樹

取材日：令和元年 11 月 10 日（日）　場所：共和のもりセンター（旧・共和小学校）

共和のもりセンターグラウンドで 11 月 10 日、「第 37 回共和地区親睦ゲートボール大会」が開催されました。共和地区の住民との親睦や交流などを目的に年に一度開かれているもので、１チーム４人による 22 チームが参加し優勝を目指す今大会は、今年でなんと 37 回目（37 年目）を迎えました。社会教育委員は、きつねくんチーム（江上、大澤、加藤、河合）、たぬきくんチーム（武尾、村上、山崎、藤澤）の２チーム８人で参戦しました。

まずは開会式に続き、湯川町長、牧島衆議院議員を始めとする来賓の始球式で始まりました。晴天の下、子どもからお年寄りまで、22 チームによる４ブロック（各ブロック５～６チーム）内での総当たり戦で、熱戦を繰り広げます。

一方、この大会の大きな目的は「親睦」であり、共和ルールという特別ルールが設けられており、子どもでも初心者でも楽しめる大会にうまく工夫されていることに感心しました。また、各ブロックには共和の人たちで形成されるチームが、それぞれ配置されていると聞きました。

１試合は 20 分、本部および主審の進行で、限られた時間の中、テンポよく試合が進められていました。副審は試合に出ていないチームリーダーが務めます。大会が進むにつれて、チーム内、ブロック内、会場全体の一体感が生まれてきたように感じました。

お昼には、パンフレットにもあるように「おわんと箸をもって参加しよう」の合言葉通り、持参したお椀には JA 婦人部特製の具たくさんなおいしい豚汁が配られました。

午後の試合を終え、各ブロックの優勝チームが決定した後の総合優勝決定戦は、第１ゲートの通過数で競いました。選手たちの渾身の一打に大きな歓声が挙がっていました。

優勝は「頼朝桜チーム」、準優勝は「新東名(A)チーム」、３位「JA(B)チーム」、４位は我が「たぬきくんチーム」という結果となりました。たぬきくんチームの４人は、総合優勝決定戦では、誰も第１ゲートを通過させることができず４位となりましたが、未経験者もいる中でブロック優勝することもでき大健闘でした。

優勝決定戦が終わるとトレーニングセンターに場所を移動し、表彰式と懇親会が開かれました。優勝から４位までのチームには、お米４キロの賞品がメンバー４人全員に手渡されました。その他のチームには様々な特別賞が考えられており、出場全 22 チームが表彰され盛り上がりました。

懇親会は、今年から共に戦った各ブロックのメンバーでテーブルを囲むスタイルに変更したそうです。1 日戦い終えたブロック内のメンバーとの話も進み、親睦を深めることが出来ました。

本当に最後まで楽しめる大会でした。ありがとうございました。

10　参考資料

（1）アンケート結果

1　共和地区は住みやすいですか。

年代	10代		20代		30代		40代		50代		60代		70代		80代以上		年代不明	合計	回答率
性別	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性		
はい	0	0	3	3	1	2	1	2	2	6	10	9	7	9	6	4	1	66	54%
いいえ	0	1	1	1	0	0	2	1	0	5	3	3	6	5	3	2	0	33	27%
わからない	2	0	1	2	0	0	2	1	3	1	1	1	2	2	1	3	0	22	18%
無回答													2					2	2%
計	2	1	5	6	1	2	5	4	5	12	14	13	17	16	10	9	1	123	100%

2　前記の質問で答えた理由をおたずねします。（複数可）

年代	10代		20代		30代		40代		50代		60代		70代		80代以上		年代不明	合計	
性別	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性		
自然が豊か	0	0	2	5	0	1	2	2	3	10	6	9	10	8	5	3	1	67	①
人が優しい	0	0	1	5	0	1	1	1	1	5	4	1	2	7	4	2	1	36	
地域の人が協力している	0	0	0	4	0	1	1	1	2	6	4	4	8	7	4	1	0	43	
交通が不便	0	1	1	2	0	0	3	1	2	8	4	6	9	6	5	5	0	53	②
福祉バスがある	0	0	1	5	0	0	1	1	1	6	5	5	7	7	3	3	1	46	
活動の拠点がある	0	0	0	3	1	0	1	0	1	2	3	2	3	6	2	2	0	26	
店がない	0	1	0	1	1	0	0	1	2	6	2	2	5	7	5	3	0	36	
鳥獣被害が多い	0	0	0	3	0	0	2	1	1	8	3	3	9	5	7	5	0	47	③
公共施設が少ない	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	1	0	8	3	4	1	0	20	
人が少ない	0	0	2	2	1	1	1	0	1	3	2	2	5	4	4	4	1	33	
楽しい行事がある	0	0	0	2	0	0	0	0	0	2	2	0	0	2	1	2	0	11	

3　共和地区で自慢できることはなんですか。（複数可）

年代	10代		20代		30代		40代		50代		60代		70代		80代以上		年代不明	合計	
性別	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性		
自然が豊かなところ	2	1	4	4	0	1	3	3	4	11	10	11	11	9	7	5	1	87	①
多くの行事をとおしてふれあい交流がはかれているところ	0	0	0	3	0	1	3	3	0	2	5	3	4	6	6	2	0	38	
奉仕活動への意識が高く、多くの人が参加するところ	1	0	0	2	0	1	2	2	1	6	5	4	8	7	8	2	1	50	
交通手段として共和福祉バスがあるところ	1	0	1	4	0	1	2	1	2	5	4	7	10	10	7	5	1	61	③
「お峯入り」をはじめとする歴史と文化を継承しているところ	1	1	2	3	0	0	2	3	3	7	7	5	7	11	9	4	0	65	②
結束力が強いところ	0	0	0	1	0	0	2	1	1	2	4	3	2	5	7	2	0	30	

4　地域の行事に参加しますか。

年代	10代		20代		30代		40代		50代		60代		70代		80代以上		年代不明	合計	回答率
性別	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性		
よく参加する	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	5	3	8	5	1	2	1	28	23%
参加する	1	0	0	2	1	1	3	2	2	4	4	3	6	3	3	1	0	36	30%
あまり参加しない	0	1	3	4	0	1	0	1	2	5	5	5	2	5	3	3	0	40	33%
ほとんど参加しない	1	0	2	0	0	0	2	1	0	1	0	2	1	2	3	3	0	18	15%
計	2	1	5	6	1	2	5	4	5	12	14	13	17	15	10	9	1	122	100%

5　最近（過去１～２年）参加した行事をおたずねします。（複数可）

年代	10代		20代		30代		40代		50代		60代		70代		80代以上		年代不明	合計	
性別	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性		
夏祭り	0	1	2	4	1	2	3	2	5	6	8	8	10	8	5	1	1	67	②
サンマの夕べ	0	0	1	3	1	0	1	1	2	3	4	1	1	2	0	0	1	21	
ゲートボール大会	0	0	0	2	1	0	1	1	3	5	6	6	9	7	5	1	1	48	
エコの日	0	0	0	4	1	1	2	2	3	7	11	4	11	7	4	1	1	59	③
道づくり	0	0	1	1	1	1	2	1	5	5	11	2	12	3	5	2	1	53	
防災訓練	1	1	0	3	0	1	3	1	4	7	11	8	14	11	6	6	1	78	①
環境整備	1	0	0	3	1	1	2	2	4	5	9	1	14	6	3	2	1	55	
植樹作業	1	0	0	2	1	1	0	1	2	5	6	4	8	1	2	0	1	35	
どんど焼き	1	1	1	1	0	1	1	0	2	2	10	5	11	10	3	2	1	52	
餅つき	0	0	1	1	1	0	1	0	1	1	5	2	3	4	0	0	1	21	
しめ縄つくり	0	0	0	1	1	0	1	0	1	1	4	2	4	4	0	0	1	20	
県外視察研修	0	0	0	1	0	0	1	0	0	3	5	2	12	7	4	2	0	37	

6　お峯入りの継承についておたずねします。

（１）継承していくには何が大切ですか。（複数可）

年代	10代		20代		30代		40代		50代		60代		70代		80代以上		年代不明	合計	
性別	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性		
共和の誇りや郷土愛	1	1	2	4	0	0	2	3	2	7	6	6	6	8	8	1	0	57	②
使命感	0	1	0	1	0	0	0	1	0	3	5	2	7	3	4	1	0	28	
協力体制	1	1	3	3	0	1	2	3	2	8	8	7	7	7	8	4	1	66	①
時間的余裕	0	1	0	2	1	1	2	2	2	3	2	5	2	2	3	4	0	32	
親から子への伝承	1	0	1	2	0	1	0	1	2	5	7	3	7	7	4	4	0	45	③

（２）継承するうえで何がむずかしいですか。（複数可）

年代	10代		20代		30代		40代		50代		60代		70代		80代以上		年代不明	合計	
性別	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性		
共和の誇りや郷土愛	0	1	1	0	0	0	0	1	0	3	3	2	7	2	3	1	0	24	
使命感	0	0	1	0	0	0	0	1	0	2	3	2	5	6	3	0	0	23	
協力体制	1	1	2	5	0	1	3	2	3	7	5	6	9	9	5	5	1	65	①
時間的余裕	1	1	1	4	1	0	2	3	1	4	3	4	4	4	3	3	1	40	③
親から子への伝承	1	0	2	2	0	0	1	2	2	6	3	5	7	9	5	5	0	50	②

7　共和地区の今後の課題は何だと思いますか。（複数可）

年代	10代		20代		30代		40代		50代		60代		70代		80代以上		年代不明	合計	
性別	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性		
人口の減少が心配(限界集落になるおそれ)	2	1	4	4	0	2	3	4	2	9	11	10	14	15	7	8	0	96	①
高齢化により支えあいが難しくなる	1	1	2	3	0	2	5	3	3	8	9	8	12	13	10	5	1	86	②
鳥獣被害が増加する	1	0	0	3	1	1	2	2	2	8	9	9	8	10	8	9	0	73	③
山林等が荒廃し災害が起きる心配がある	0	1	0	5	1	2	4	2	3	10	7	5	7	6	7	5	1	66	
社会福祉のさらなる充実	1	0	2	0	0	0	2	1	1	5	2	3	4	7	4	3	0	35	
移住者、定住者の確保	0	1	2	3	0	1	3	1	3	4	6	5	5	6	3	2	0	45	
交通アクセスの整備	0	0	2	1	0	1	3	2	3	8	4	8	7	11	1	4	0	55	

8　共和地区の各組織や団体、行政への要望は何ですか。※自由記述のため省略

9　【世帯主のみ】共和地区での生活についておたずねします。

（１）いつから住んでいますか。

年代	10代		20代		30代		40代		50代		60代		70代		80代以上		年代不明	合計	回答率
性別	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性		
先祖代々住んでいる	0	0	1	1	0	0	1	0	2	2	6	1	12	5	7	5	0	43	58%
終戦後に移住した	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	4	1	3	0	1	1	0	11	15%
平成以降に移住した	0	0	1	1	1	2	1	0	2	2	5	2	1	1	1	0	0	20	27%
計	0	0	2	2	1	2	3	0	4	4	15	4	16	6	9	6	0	74	100%

（２）家族構成についておたずねします。

年代	10代		20代		30代		40代		50代		60代		70代		80代以上		年代不明	合計	回答率
性別	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性		
子どもや孫と同居している	0	0	0	0	1	1	1	0	3	2	4	0	3	2	4	2	0	23	32%
夫婦だけで生活している	0	0	1	0	0	1	2	0	1	0	7	3	11	3	4	1	0	34	48%
ひとりで生活している	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	2	1	3	1	1	4	0	14	20%
計	0	0	1	1	1	2	3	0	4	3	13	4	17	6	9	7	0	71	100%

（３）子どもが他地区に住んでいる方におたずねします。子どもが他地区に住んでいることについてどう思いますか。

年代	10代		20代		30代		40代		50代		60代		70代		80代以上		年代不明	合計	回答率
性別	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性		
戻ってきてほしい	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	1	0	3	6%
今のままで良い	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	1	2	1	3	2	0	12	24%
子どもの考えにまかせたい	0	0	0	0	0	1	0	0	2	1	6	3	11	5	4	2	0	35	70%
計	0	0	0	0	0	1	0	0	2	1	9	4	15	6	7	5	0	50	100%

（２）アンケート自由記述

≪男性≫　回収率 78.9%（回収数 60/配付数 76）

【年代別回答者数】

年代	10 代	20 代	30 代	40 代	50 代	60 代	70 代	80 代以上	年代不明	計
人数	2	5	1	5	5	14	17	10	1	60

【設問１】共和地区は住みやすいですか。（「はい」「いいえ」の理由）

〈１０代・２０代〉記述無し
〈３０代〉やりたいことをやりやすい
〈４０代〉道路が狭い、仲間がいない
〈５０代〉記述無し
〈６０代〉学校がない、行事が多い
〈７０代〉自然環境はよい。しかし人間環境は…？
〈８０代以上〉記述無し

【設問２】共和地区での自慢できることはなんですか。

〈１０代・２０代〉記述無し
〈３０代〉重機や製材機などの機械や道具が揃っている、野生動物や野鳥が多い
〈４０代〉静か（騒音がない）
〈５０～７０代〉記述無し
〈８０代以上〉福祉バスは地域の人達の足となって、末永く走ってくれることを望む。
各々の責任において、きちんと実施されている。

【設問６】国指定（S56）重要無形民俗文化財「お峯入り」の継承について

①お峯入りを継承していくには、何が大切ですか。

〈１０代・２０代〉記述無し
〈３０代〉資金、定期的に続けていくこと
〈４０代〉個々の生活を犠牲にしてまで継承する必要性を感じない、棒ふりの参加者の負担は厳しい、参加者に無記名で存続についてアンケートしたほうが良い
〈５０代〉記述無し
〈６０代〉人集め
〈７０代〉保存会を中心にした地区内での演技伝承会を年に１回位開催すること。その体制づくりができていないので、早急に発足すべきではないのか。
山、水、林を豊かに。
〈８０代以上〉体力的に出られなくなってしまった
〈年代不詳〉親から子への伝承だけでなく、誰にでも継承できる仕組みを考える。

②継承するうえで、何が難しいですか。

〈１０～３０代〉記述無し
〈４０代〉人手の確保、金銭面
〈５０代〉記述無し
〈６０代〉人員集め（※同意見４件：少子高齢化、出演者、スタッフ）、伝承指導者の育成
〈７０代〉地区内の人口減少と人材不足、伝承する若い人がいない、郷土愛はあるが一人で生活しているので…、今までの伝承スタイルにこだわらず地区内外から希望者を